

# 企業が求める『グローバル人材』とは

## 軸となるのは“専門性”×“異文化コミュニケーション力”

世界戦略を進める多くの企業で『グローバル人材』へのニーズが高まり続けている。  
様々なメディアでも注目度が高まるグローバル人材だが、その実態はどのようなものなのだろうか。  
世界最大規模のODA実施機関として、国際協力事業を全世界で実施し、民間企業との連携事業も多い  
独立行政法人 国際協力機構 (JICA) が考える、世界で活躍できる人材の条件とは。

世界150を超える国と地域に対して、保健医療、農業、都市開発、環境、エネルギーといった幅広い分野で日々変化し続ける途上国の課題解決に取り組んでいるのが、独立行政法人 国際協力機構（以下 JICA）だ。その活動内容は、現地での技術指導にとどまらず、発電所や浄水場、道路や橋梁といった大規模な経済インフラ施設の建設事業などを JICA 職員が案件形成段階から途上国の人々と共に自ら推進することも少なくないという。

JICA の事業開始は1954年までさかのぼる。国内企業のグローバル化が本格化する以前から、世界中に人材を派遣し、グローバルに活躍できる人材を育ててきた JICA。その JICA が考える、グローバル人材。について、昨年末まで自身もイラクに駐在していたという人事部の大野翔太郎氏に話を聞いた。

### まず伸ばすべきは、武器としての『専門性』

「グローバルに活躍できる人材」といっても、まずは自身の武器となる「専門性」がなければ、現地では求められる人材、活躍できる人材にはなりません。例として、JICA では発展途上地域において、病院・学校等の社会インフラ施設や発電所・道路といった経済インフラの建設事業を実施しており、現地の担当者との折衝や、事業のマネジメントを日々行っていますが、こうした事業を円滑に進めるためには、交渉力、事業マネジメントだけでなく、事業の技術的な点を途上国政府担当者と協議するだけ

の機電系や建築・土木といった分野の専門知識が必要不可欠です。実際の建設業務は開発コンサルタン トやゼネコンをはじめとする民間の施工会社が実施しますが、事業内容の変更や突発的な問題に対して、経済的な側面のみならず、技術的な観点も含めて解決を提供するのは私たちの仕事です。

機電や建築・土木の他にも、医療、農業など世界から求められている日本の技術は数多くあります。すでに自分の専門分野を持っている理系の方は、「自分の専門性は社会に対してどのように活かすことができるのか」といったこともしっかり見据えたいうえで、専門性を高めていってほしいですね。

### 異文化理解+伝える力=異文化コミュニケーション力

グローバルに活躍するためには、自らの専門性に加えて語学力やコミュニケーション力が重要です。ただ、注意しなければならないのは、流暢に外国語を話せるだけでは十分ではないという点です。現地の方と本当の意味での意思疎通を図るためには、語学に堪能であるだけでなく、現地の文化的な背景を理解した上で意思疎通を行う「異文化コミュニケーション力」が非常に重要といえます。相手の有する文化的背景への理解が浅ければ、意思疎通はおろか、トラブルすら起こりかねません。

私が駐在したイラクでの体験を例にお話すると、「インチャラー」が特に印象的でした。インチャラーとは、「神の思し召しのままに」を意味し、イラクを含む中東では何か約束をする際に「インチャラー」とよく



(上) アジアとヨーロッパの境であるボスポラス海峡を横断する地下鉄用トンネルの建設途中(トルコ)  
(右) 公共水栓が設置され、安全な水を飲めることに喜び子供たち(カンボジア)



返答されます。外国人である私たちからするとインシャラーは肯定なのか否定なのか曖昧で、とすれば言い訳と捉えがちです。一方、彼らの文脈では「人事を尽くして天命を待つ」という意味であり、必ずしも適当に答えている訳ではないのです。逆にアメリカを始めたとする欧米諸国との契約に際しては、「そこまで細かく決めるのか」というほど細部を詰めておかないと、後々のトラブルの元になります。このような文化的差異を理解せずに、相手の言葉を顔面通り受け取っていると意思疎通に食い違いが生じてしまうのです。また、技術領域の専門的な会話では、日本なら阿吽の呼吸で済むところが、途上国では「ここまで細かく丁寧に話さなければ共通認識を持っていいのか」と感じることも少なくありませんでした。海外では相手のバックグラウンドは自分と全く異なるのだということを認識し、細心の注意を払って、伝える努力、をしなければならぬのです。

### 学生の頃から世の中の多様性を知ろう

近年、JICAにも海外進出を狙う民間企業から寄せられる相談や連携事業が増えています。国内市場が縮小し、エネルギー自給率・食糧自給率も低い状況において、企業が日本国内だけで経済活動を完結することが極めて難しい時代になっており、多くの企業は海外に進出し、新しい市場を開拓していかないと成長を維持できません。このような中、海外で活躍できる人材へのニーズは高まり続けています。

「グローバルに活躍したい」と考えている方は、学生

のうちに多くの人と会い、異なるコミュニティに飛び込んでいってほしいと思います。手取り早く海外に行くのも選択肢の一つですが、難しければ国内でもかまいません。年代や性別、国籍など異なる背景を持った人と会う機会を作ること、世の中の多様性を感じてほしいと思います。

インターネットで様々な情報を得られる時代になりましたが、単なる知識としての情報ではなく、経験知のように自らが体験してのみ得られる知識を大切にしてもらいたいと思います。人付き合いでも、メールだけでは伝わらず、会って初めて分かること、伝えることがあります。そういった経験が多い方ほど、異文化への順応はしやすいと思います。

さらに欲を言えば、そういった多種多様な人々を含めた周りの人を、巻き込んで、行動した経験があるともっといいですね。自分だけではできないことを、周囲の力を借りて成し遂げるという経験は社会に出た際にきつと役に立つはずですよ。



#### Profile

独立行政法人 国際協力機構 (JICA)  
人事部 人事企画課 調査役  
大野 翔太郎 (おおの・しょうたろう)

復興途上のイラクにてJICA現地事務所設立、ならびに上下水道の敷設事業や廃棄物処理施設の事業形成などに従事。  
2012年より人事部。